

平成二十九年 度 金沢学院短期大学 入学試験問題 (一般入試日 期)

国 語

(注 意 事 項)

解 答 用 紙 に 「国 語」と 記 入 ・ マ ー ク し て か ら 解 答 し て く だ さ い。

問 題 は 1 ペ ー ジ か ら 14 ペ ー ジ ま で あ り ま す。

問 題 は 持 ち 帰 っ て も よ い で す が、コ ピ ー し て 配 布 ・ 使 用 す る の は 法 律 で 禁 じ ら れ て い ま す。

(解 答 上 の 注 意)

解 答 は、解 答 用 紙 の 解 答 欄 に マ ー ク し て く だ さ い。例 え ば、

10

と 表 示 の あ る 問 い に 対 し て

④ と 解 答 す る 時 は、下 記 の (例) の よう に 解 答 番 号 10 の 解 答 欄 の ④ に マ ー ク し て く だ さ い。

(例)

解 答 番 号	解 答 欄
10	① ② ③ ● ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

問題は次のページからです。

第1問 次の文章は、内田樹「反知性主義者たちの肖像」の一節である。これを読んで、後の問い（問1〜7）に答えよ。

反知性主義者たちにおいては時間が流れない。それは言い換えると、「いま、ここ、私」しかないということである。反知性主義者たちが例外なく①カジョウウに論争的であるのは、「いま、ここ、目の前にいる相手」を知識や情報や推論の鮮やかさによって「威圧すること」に彼らが熱中しているからである。彼らはそれにしか興味がない。

（ a ） 、彼らは少し時間をかけて調べれば簡単にばれる嘘をつき、根拠に乏しいデータや一義的な解釈になじまない事例を自説のために駆使することを厭わない。これは自分の仕事を他者との「協働」の一部であると考える人は決してすることのないふるまいである。

私はこれを「エンドユーザー・シップ」というふうに呼んでいる。自分の知的努力を享受するのは自分ひとりである。自分の努力がもたらした成果は自分が使い切る。誰にも分与しない、②ゾウヨもしない。そう考える人のことを私は「エンドユーザー」と呼ぶ。

これは大学で卒論指導をしているときに学生たちに毎年伝えたことである。私はこんなふうにオリエンテーションのときに話した。

諸君にはこれから卒業論文というものを書いてもらう。これは君たちがこれまで書いてきた「レポート」とは性質が違うものである。「レポート」の場合、君たちは自分がどれほど勉強したか、どれほど出席して講義をノートしたかを、教師ひとりに③センチツ的にアピールすれば済む。「レポート」はふつう教師ひとりしか読まない。だから、たとえそこに嘘を書いても、読んでもいない本を読んだことにしても、ネットからコピーした文章を切り貼りしても、教師ひとりがそれを見落とせば、諸君は高い評点をもらえる可能性がある。そういう「レポート」は評点をもらったらその使命を終え、誰にも読まれることなく、そのまま退蔵され、やがて捨てられる。それがどれほど不出来でも、どれほど誤謬や推論上のミスがあっても、それで困るものはない。

卒論はそれとは違う。卒論は君たちのほとんどにとって生涯にただ一度だけ書く「学術論文」である。それは潜在的には「万人」が読者であるということの意味している。教師ひとりが読むわけではない。だから、仮にデータの数値が間違っていたり、引用文献の書名が間違っていたり、事実誤認があったり、論理的に筋道が通らないことが書かれていた場合、仮に教師が読み落としても、他の誰かから指摘される可能性がある。実際に、うちのゼミ生の卒論をネットで公開したとき、自著からの「盗用」に気づいて指摘してきた人がいた。その学生はまさか盗用した

本人が自分の論文を見ることになるとは思っていなかったのだろう。

(b)、論文の読者が「万人」であるということは書き手にそれなりの緊張感を求める。けれども、それは必ずしもストレスフルな緊張感には限られない。諸君には「君たちと同じテーマで卒論を書くことになった、何年か先の内田ゼミの後輩」を想定読者に論文を書いて欲しい。それならどう書いていいかわかるはずだ。

「 X 」ような「査定的なまなざしを意識して文章を書くことがいつもよいこととは限らない。たいていの場合、査読者に「自分の論文がどれほどの評点を得るのか」怯えながら書くよりも、自分の後輩を想定読者にして、彼女たちが「自分の論文からどれほどの利益と愉悦を得るか」を想像しながら書く方がずっと生産的だ。

そう考えれば、どう書けばよいかはわかるだろう。君たち自身がこのテーマで卒論を書くことと決めたとき、「こういう先行研究があったらいいな」ということを漠然と思い描いたはずだ。だったら、それをそのまま後輩のために書くようにすればいい。論理的な記述を心がけるのも、引用に正確を期すのも、データや史料の恣意的解釈を④「ジセイ」するのも、それは君たちの書いた「先行研究」を後輩たちがその上に立つことのできる「肩」にするためだ。君たちが読みやすく、論理的で、データが豊富で、信頼性の高い研究論文を書き残せば、それは「パブリック・ドメイン」として多くの後続研究者に繰り返し利用されることになる。学術研究では「被言及回数・被引用回数」がその論文のもつ影響力の尺度として用いられるけれど、それは言い換えれば、その研究の「社会性・公共性」が高いということだ。

君たちがこれから書く論文の価値を判定するのはゼミの指導教師である私ではない。これから君たちの論文を読むことになる「まだ存在していない読者たち」である。その人たちのために書かなければならない。(c)「レポート」の場合、どれほどひどいものを書いても、どれほど引用のしかたがずさんでも、データの転記ミスがあっても、それを読んで実害をこうむる読者は(絶望的な気分になる教師の他には)誰もいない。でも、(d)「論文」の場合はそうではない。もし、君たちが引用出典の頁数を間違えたり、書名を誤って表記していたら、後輩たちは典拠を探しあぐねて図書館で何時間もうろうろしなければならぬかも知れない。論理的に記述されていなければ、いったい何を言いたいのか知るために繰り返し同じ頁をめくらなければならないかも知れない。論文の質がよいか悪いか、それから影響を受けるのは、まだ見ぬ読者たちである。君たちが質のよい論文を書けば、それによって受益するのは、まだ見ぬ読者たちである。君たちはその人たちに向けて「よいパスを出す」ことを期待されている。論文において君たちはエンドユーザーではなく、 Y なのである。

② おおよそそのような話を私は卒論ゼミの最初の時間に学生たちに話してきた。易しい言葉づかいではあるけれど、私なりに「知性的」であるとはどういうことか、「科学的」であるとはどういうことかを学生に説き聞かせてきたつもりである。それは最終的には「まだ見ぬ読者たち」との協働の営みをどれほど生き生きと想像できるかにかかっている。

反知性的なふるまいは「狭さ」を特徴とする。それは上に書いたとおりである。彼らは「いま、ここで、目の前にいる人たちを威圧すること（黙らせること、従わせること）」を当面の目標にしている。それ以外には目的がない。その場での相対的優位の確保、それが彼らの求めるものものすべてである。ほんとうにそうなのだ。彼らには「当面」しかない。彼らは時間が不可逆的なしかたで流れ、「いま、ここ」で真実とされていることが虚偽に転じたり、彼らが断定した言明の誤りが^⑥バクロされることを望まない。それくらいなら、時間が止まった方がましだと思うのである。この「反時間」という構えのうちに反知性主義の本質は凝集する。

『日本の反知性主義』による。一部改変。

問1 傍線部①～⑤に当たる漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

解答番号は、

1

～

5

。

① カジヨウ

1

① 地方の議会にチンジヨウする。

② 河川の汚水をジヨウカする。

③ 車に彼女とドウジヨウする。

④ 会社の利益のジヨウヨを蓄積する。

⑤ 他人に自分の権利をジヨウトする。

② ゾウヨ

2

① 現代社会のジツゾウを探る。

② 卒業の記念品をゾウテイする。

③ 新しい競技場をケンゾウする。

④ 国の将来のためにゾウゼイする。

⑤ ライバルにゾウオの念を抱く。

③ センイツ 3

① 自分だけの仕事にセンネンする。

② 流行の病にカンセンしてしまふ。

③ センサイな技巧を駆使した工芸品。

④ センメイに記憶している思い出。

⑤ 武力で他国をセンリョウする。

④ ジセイ 4

① 故郷の父母に会いにキセイする。

② 大会の開会式でセンセイする。

③ 文学のテキストをセイドクする。

④ 国会で法律をセイテイした。

⑤ 彼はセイジツな人柄の男だ。

⑤ バクロ 5

① 政治家がワイロを受け取る。

② まるでメイロのような道。

③ 仏壇にコウロを置く。

④ 熱いフロに我慢して入る。

⑤ 彼は私をロコツに非難した。

問2 空欄（ a ）と（ b ）には同じ接続詞が入る。最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 6。

① たとえば

② ところで

③ また

④ しかし

⑤ だから

問3 空欄 X には、ある慣用句が入る。前後の文脈を踏まえて最も適当と思われる語句を、次の①～⑤の中から一つ選べ。

解答番号は 7。

① 揚げ足を取る

② 眼光紙背に徹す

③ 重箱の隅を突く

④ 歯牙にも掛けない

⑤ 豆腐の角に頭をぶつける

問4 傍線部(ア)「レポート」と(イ)「論文」とあるが、両者の違いを、筆者はどのように考えているか。本文の文脈を踏まえた上で、その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 「レポート」は誤謬やミス、コピーや盗用が多少あっても構わないが、「論文」は学術論文なので、引用や典拠の表記などの誤謬やミスは絶対に許されないものである。
- ② 「レポート」は講義に出席していれば高い評点をもたらえる可能性があるが、「論文」は査読者から誤りを指摘される可能性があり、その評価はストレスフルで厳しい。
- ③ 「レポート」は自分がどれほど勉強したかをまとめたものであり、「論文」は論理的で、データが豊富で、信頼性の高いことが最優先である。
- ④ 「レポート」はふつう教師ひとりしか読まないが、「論文」はまだ見ぬ読者たち、後続研究者や「万人」を想定して書かれなければならない。
- ⑤ 「レポート」は担当の教師を絶望的な気分させるが、「論文」では、教師は後続研究者のひとりとして多くの利益と愉悦を必ず得ることができる。

問5 本文の空欄 Y に入る最も適当と思われる語句を、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 9。

- ① アタッカー
- ② デイフエンダー
- ③ ドリブラー
- ④ パッサー
- ⑤ レシーバー

問6 傍線部(ウ)「おおよそそのような話を私は卒論ゼミの最初の時間に学生たちに話してきた」とあるが、どうして筆者はこの本文の中で、卒論ゼミで学生たちに伝えてきた話を引用したのか。その理由の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。解答番号は 10。

① 卒論ゼミの学生たちに話してきた「レポート」と「論文」の違いは、大学や研究機関以外の一般の人々には意外に知られていない事柄であるから。

② 卒論は学術論文としてまだ見ぬ読者たちとの協働の営みであることを確認することによって、反知性主義者のエンドユーザー・シッブや反時間性を批判することになるから。

③ 卒論ゼミの学生たちに「君たちと同じテーマで卒論を書くことになった、何年か先の筆者のゼミの後輩」にも誇れるような、学術論文としての卒論を書いてもらえるように願っているから。

④ 「知性的」・「科学的」であるとはどういうことかを学生に説き聞かせてきたのと同じように、反知性主義者にも「知性的」・「科学的」であることを要請しているから。

⑤ 卒論ゼミのオリエンテーションのときに学生たちに話してきた学術研究の「社会性・公共性」は、反知性主義者の反時間性と共通する要素があるから。

問7 次の①～⑤のそれぞれの文について、筆者の述べる「反知性主義者」の特徴やふるまいに当てはまるものに①、当てはまらないものに②をマークせよ。解答番号は 11 ～ 15。

① 何よりも「当面」やその場の相対的優位の確保を目標とする。

② 自分の仕事や成果を自分だけが享受するのではなく、他者との「協働」の一部であると考ええる。

③ 知識や情報や推論の鮮やかさによって「いま、ここで、目の前にいる相手を威圧すること」に熱中する。

④ 時間が不可逆的なしかたで流れるのを望まず、時間の流れを押しとどめようとする。

⑤ 長い時間の流れの中におのれを位置づけるために、想像力を駆使する。

15

14

13

12

11

第2問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ。

「私」は、小説家である。思いもかけず仕事ははかどって、余分なお金を手にしたが使うあてはない。急に思い立って、新聞で見た美術展覧会にでかける。そして、もしその展覧会で自分が買えるような気に入った作品があればありがたい、という気になっている。ちょうどその日は、「私」の三十一歳の誕生日なのであった。

さて展覧会場でさまざまな絵を見ているうちに私はたった一つ、気に入った絵を見つけた。小さなスケッチだ。それはラプラアドという人の手になったもので「ユー島」という画題であった。どんな画家か私は知らなかったが、この画家の絵は水彩と油彩と合して十二三はあったろう。水彩は油彩よりも前の室にあつたが、その水彩を見た時から、ちよつと私の心にふれた。手腕のある人というよりは心持のある画家らしいと私は感じた。それから見まわつて来ると私が目をとめたのはこの「ユー島」であつた。そういう画題だが、私には島の風景も何も描いて無い——寧ろ「旅愁」と言つた方がよくはないかと思える。事実、この茶っぽい黄色の画面には景色より部屋の壁の方がよけいに描かれてあつた。そうしてその壁のまんなかの海に開かれた窓をとおして何だかぼんやりと舟をつないだ水際やらその遠方に樹か建物だかそんなものがあつた。このとおり取り留めのない構図ではあつたし、それに部屋の隅にかかつていたのだから、恐らくあの会場を見た多くの人はそれを覚えてはいまい。一たいその画家が地味なところへ、就中、その絵が一番くすんでいた。それなのに今までのいろいろの絵を味わいながら見ていた私の目は、「ユー島」の前まで来ると、たとえ知り合いの顔を遠くから見かけでもしたような気持で思わず瞳を引き入れられた。そうして、私の瞳に触れたそのものはその瞬間、画ではなくつてやつぱりなつかしく相対した一つの瞳であつたような気がする。それは海岸の小ぼけな宿屋の一室へ疲れた体を座らせた旅人が窓外を見た時の瞳である。その旅人の瞳を通して私もまた「ユー島」を見た。太陽のツワイライトでないならば、霊のツワイライトであろう。もし空が曇っていないのなら心が旅愁で曇っているのであろう。絵はうすれた光のなかでばやけている。色も形も、イ朴訥ではあるが、その诗情のために絵は豊かである。油絵で描かれた東洋の文人画の倂である。ラプラアドという人の作は、見てゆくとどれもこれもそんな気持が溢れていた。私はふとラプラアドの画を欲しいと思つた。ただその絵は私が持っているだけでは金が足りなかつた。尤もそれに足すぐらいの金は私に出来ない事はない。ただ未だ書くあてもない原稿で金を借りなきやならない……

私はラプラアドの諸作品の前を過ぎ去って、外の人々の(セ) 作品を目で味わいながら歩いたが心の一角ではやっぱり「ユー島」を買う事を考えつづけていた。

私は場内にある喫茶店のなかへ這入^{はい}って足を休めていた。するとそこへ這入^{はい}ってくるなり、私の名を呼んだのはもう五六年も会わない古い友達であった。画家で一ころはよほど仲よくしていたのが何となく疎遠になってしまった間柄であった。しかし、むかしの友情はさすがに私たちを一つのテーブルへ案内した。

「ラプラアドというのがあるね。ありやどんな人だい？」

「ふむ、君には気に入ったかな。なるほど或る心持はあるね。やはりインテイミストというのだろうよ」

「インテイミスト？——何ということだい？」

「そうさ。親密という字から来ているのじゃないか？ 神秘ともちがうし——字引を引いてごらんよ。——^{*}ルドンなどがその代表者だろう」

「へえ？」私にはそんな通なことはわからない。ただこの友達のいうのを謹聴するだけである。

彼は言った。「ラプラアドか。悪くはない。が、^{*}ヴラマンク^{*}の写実的な底力はない。ドラン^{*}の重厚な真実も、ルドンの深奥な幻想もない……」

「さあ、そりや……」と私は彼の言葉を遮って置いてからウェイトレスに勘定を命じながら言いつづけた。「そりやそりやかも知れぬ。ただ僕はあの幽情がいいのだ。それに苦もなくやりつぱなしに描き上げてあるところがね——^(三) 氣韻がある。俗でない」

「ふん」

彼は一応私に同意したらしくもあつた。そうでないようにもあつた。そうして私たちがその喫茶場を出た時に、彼は私の言葉を実験して見ようとも言うように、彼自身で先に立ってラプラアドの絵の方へ歩を運び返した。

彼はしばらく^{たず}佇んでラプラアドを鑑賞したようであつたが言つた——

「^(オ) いかん。いかん。」

「？」私は彼の顔を見入った。

「いや。絵は悪くはないさ。だが、君がこの絵を手に入れたというのはいかん。こりや君、そっくり君の世界じゃないか。自分で自分を見^み恍^ぼれ

るようなものだ——己惚鏡うねぼれだぜ。君は何故ヴラマンクのあの……」
と言いながら彼は、直ぐ近いところにあつた一つの絵を目顔で示しながら「あの
静物などを欲しいと言わないのだ。自然の持つている根強い優しさ懐かしさがかやき出ているじゃないか。それに手ごろの大きさではあり……」
「ただ、高い」

「それにもう売れて居る。……僕は必ずしも買うという意味で言うのではないのさ。鑑賞の目的からね。……もしヴラマンクでは甘さが足りなけ
りや、フランドラン※はどうだい。見た？ 麦稈細工むぎわらのような綺麗な色だが卑しくはない。何よりな事には、お祭りの日の小娘見たようにほがらかな
晴れやかな気持がうれしいじゃないか……」彼は雄弁に、そうして親切に語りつづけた。彼は私に自分とは反対な、自分を徒らいなに慰めるというより
は自分を養うようなものを薦めようというのであつた。そうしてそれは確かに悪い忠言ではない。彼は五六年もまるで逢いもしなくせに、私の作
品でも読むのか私をよくしつていて、私の安易な消極的な心持を見てとつてしまつて居る。（セ）それがちよつと私の心を刺した。

「ヴラマンクに、フランドラン!? 似ても似つかないが、その二人を僕に薦める君の意見は僕にも解るよ」（キ）私は寧ろ少しばかりやけになつて言
つた——尤も人ごみであつたから囁くささやくような声ではあつたが「一そ、それならデエフイ※はどうだ。あのギリギリする海や競馬場の画家は。ありや君、
生きている刻々が無限の楽しみであるような、（シ）闊達かつたつな絢爛けんらんな、そうして傍目もふらない急進的な、男性的な……」
私がそんなことを言い出した時である。私たちは不意に声をかけられて、ふりかえると、それは私たちの或る先輩の一家族がやはり見物に来てい
て、私たちを見つけたのであつた。

（佐藤春夫『厭世家の誕生日』による。一部改変。）

（注）ラプラアド：ピエール・ラプラード（一八七五～一九三二）フランスの画家。温和な色彩を用いて室内やパリの街頭風景などを描いた。

ツワイライト：トワイライトのこと。日の出前や日没後の薄明、薄暮を指す。

ルドン：オディロン・ルドン（一八四〇～一九一六）フランスの画家。幻想の世界を描いた。黒を基調とした前半生の作風から、五十歳
を境に鮮やかな色彩を使った絵を描いた。

ヴラマンク：モーリス・ド・ヴラマンク（一八七六～一九五八）フランスの画家。激しい筆触と強烈な色彩とを用いたが、のち暗い色調
に転じた。風景画が多い。

(注) ドラン：アンドレ・ドラン（一八八〇～一九五四）フランスの画家。風景、人物、静物など様々な画題を多様な作風で描いた。

フランドラン：イッポリイト・フランドラン（一八〇九～一八六四）フランスの画家。宗教画を多く制作した。

デュファイ：ラウル・デュファイ（一八七七～一九五三）フランスの画家。明るい色彩と軽快な筆さばきによって色彩の魔術師と呼ばれた。

問1 傍線部(ア)「私の瞳に触れたそのものはその瞬間、画ではなくってやっぱりなつかしく相対した一つの瞳であったような気がする」とあるが、

これはどのようなことを述べたものか。次の①～⑤のうちから最も適当なものを一つ選べ。解答番号は 。

- ① 「ユー島」の絵は、知り合いと向き合っているような親しみやすさがあるということ。
- ② 「ユー島」の絵は、なぜか懐かしいひとを思い出させる力があるということ。
- ③ 「ユー島」の絵には、昔どこかで見たことのあるような既視感があるということ。
- ④ 「ユー島」の絵に描かれた風景は、実際のユー島には存在しないものであるということ。
- ⑤ 「ユー島」の絵は、その風景を眺めている画家の心を身近に感じさせるものであるということ。

問2 傍線部(イ)「朴訥」、(エ)「気韻」、(ク)「闊達」の意味として、最も適当なものを、それぞれ次の各群の①～⑤のうちから一つずつ選べ。

解答番号は ～ 。

(イ) 朴訥

- ① 野性的で精力的
- ② こまやかで優しい
- ③ 鮮やかで劇的
- ④ 単純で飾り気がない
- ⑤ 凝っていて巧み

(エ) 気韻 18

- ① 良心 ② 意欲 ③ 技術 ④ 才能 ⑤ 品格

(ク) 闊達 19

- ① 細かいことにこだわらない ② 難しいことも楽々となす ③ 脂ぎってぎらぎらした
④ 健康で清潔感のある ⑤ 派手でよく目立っている

問3 傍線部(ウ)「作品を目で味わいながら」とあるが、これはどういうことか。次の①～⑤のうちから最も適当なものを一つ選べ。

解答番号は 20。

- ① 作品を一通り鑑賞しながら ② 作品のテーマだけを確認しながら ③ 作品を丹念に分析しながら
④ 作品を描いた作者を想像しながら ⑤ 作品に黙って向き合いながら

問4 傍線部(オ)「いかん。いかん。」とあるが、「私」の友達がそのように言った理由は何か。次の①～⑤のうちから最も適当なものを一つ選べ。

解答番号は 21。

- ① ラプラアドの絵についての「私」の解釈が、自分の解釈と真つ向から対立するものであったから。
② ラプラアドの絵を好む「私」に、自らを成長させ伸ばしていこうとする気概の欠如を感じたから。
③ ラプラアドの絵を買いいたいという「私」に、経済的にも教養的にも背伸びしている危うさを感じたから。
④ ラプラアドの絵を語る「私」に鋭い批評眼を感じ、いずれライバルになるのではないかと不安を感じたから。
⑤ ラプラアドの絵に、「私」を社会から孤立させる危険な思想が表われているのを見て取ったから。

問5 傍線部(カ)「それがちよつと私の心を刺した」とあるが、どういふことを述べたものか。次の①～⑤のうちから最も適当なものを一つ選べ。

解答番号は 22。

- ① 自分と疎遠になったひとから、変わらぬ熱い友情を示されて感動したということ。
- ② 自分と段々疎遠になったひとから、いまだに友人ぶつて鬱陶うっとうしい忠告をされたということ。
- ③ 自分としばらく会わなかったひとから、予想以上に手厳しい批判を受けてしまったということ。
- ④ 自分をよく理解しているひとから、自分の痛いところを的確に突かれたということ。
- ⑤ 自分がまだ友人だと思っているひとから、思いがけず冷たい言葉を投げかけられたということ。

問6 傍線部(キ)「私は寧ろ少しばかりや、けになって言った」とあるが、その結果、「私」はどのようなことを言ったのか。次の①～⑤のうちから最も適当なものを一つ選べ。解答番号は 23。

- ① わざと友人が嫌っている画家の名前を挙げた。
- ② わざと友人が大好きな画家の名前を挙げた。
- ③ わざと今の自分の好みと正反対の画家の名前を挙げた。
- ④ わざと友人も自分も評価していない画家の名前を挙げた。
- ⑤ わざと友人が心配する、自分が好きな画家の名前を挙げた。

第3問 次の問いに答えよ。

(A) 次の①～⑤のうち、漢字表記がすべて正しいものには①、誤りが含まれているものには②をマークせよ。

解答番号は

24

 ～

28

。

- | | | | | | | |
|---|--|----|----|----|----|----|
| ① 苦渋の決断をした。
② 危機一発で逃げのびた。
③ 強行採決に反発の声があがる。
④ 内功的な性格の少年。
⑤ 国敗れて山河あり。 | <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td style="width: 20px; height: 20px;">24</td></tr></table>
<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td style="width: 20px; height: 20px;">25</td></tr></table>
<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td style="width: 20px; height: 20px;">26</td></tr></table>
<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td style="width: 20px; height: 20px;">27</td></tr></table>
<table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"><tr><td style="width: 20px; height: 20px;">28</td></tr></table> | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 |
| 24 | | | | | | |
| 25 | | | | | | |
| 26 | | | | | | |
| 27 | | | | | | |
| 28 | | | | | | |

(B) 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

このごろ、日本語が乱れている、敬語が目茶苦茶だ、外来語のカタカナが多すぎる、若者の変な造語がさっぱりわからない、日本語はこの先どうなるんだと、よく話題になる。たしかにそういう気がしないでもない。だが、本当にそうだろうか。

ここで、正しい言葉とは一体何だろうと、もう一度考えてみる必要がある。もし正しい言葉というものが、一つだけはっきり定まっているのであれば、たしかに、皆がそれだけを使えば用は足りることになる。

たとえば水を飲みたいということを言いたいとき、意味が伝わりさえすればいいのであれば、「水が飲みたい」という言い方が一つあれば充分だ。

①

人間の生活や心は限りなく豊かだ。そこで言葉にもひねりをかけようとする。「ああ、水が飲みてえな」とか「喉のどがからつからだ」とか、なぜか一本調子の言い方から外はずしてみたくなる。

とくに、若者は言葉の冒険をすることで自己主張をしたり、目立ちたがる。(2)

若者ばかりでない。職人さんなども、自分たちの職業の特色を表わすために、言葉にひねりをかけることがまある。

正しい言葉というものは、たしかにあるはずだ。(3)だから、逆に活きている言葉は、正しい言葉の外側にあるともいえる。

その造ったおもしろい言葉、ひねった言葉、隠語などが活きているということは、逆にいうと、ひねっているということを、皆が意識しているわけだ。(4)

したがって、私は日本語の行く末について、それほど心配していない。いろいろと若者が造語する。ハイティーンやローティーンが携帯電話やメールでカチャカチャやっている。(5)

しかし、逆にいえば、正しい言い方というものが意識されているから、それができるわけだ。それがなければ、言葉は通じなくなってしまう。だから、活きている言語、ビビッドな生の言葉というのは、遠心力と求心力がはたらいている。その両端の間を揺れ動いている。緊張感で人にアピールしているわけである。

(栗田勇『日本文化のキーワード 七つのやまと言葉』による。一部改変。)

問 次のA～Eの文は本文中の空欄①～⑤のどこに入れるのが適当か。それぞれ番号で答えよ。

解答番号は A ㉒、B ㉓、C ㉔、D ㉕、E ㉖。

A それはやはり言葉遊びをして、言葉の感覚を磨いている、あるいは自分の個性を主張しているのだともいえる。

B また、自分たちの遊び心や、グループの仲間意識などを満足させようとする。

C つまり、正しい言葉のあり方を、じつは知っているということになる。

D しかし、実際に生活のなかで言葉が活きているのは、ひねりをかけて、そこからちょっと外した姿である。

E しかし、現実はどうだろうか。そんな簡単なものではない。

